

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑨7

もう、30年近くも前のことになる。初任地の釜石市で暮らし始めて間もなく、職場の先輩に誘われて、私は五葉山東麓に広がる樺ノ木平付近にイワナ釣りに出かけた。これが、五葉山のふもとに入った最初の日であった。

学生時代、主に北アルプスの岩と雪に親しんできた当時の私は、東北の山の高さを知らず、身近にある五葉山は、ただの「藪山」くらいにしか考えていなかった。当然、進んでその山に入ろうという気持ちにはなかった。ただ「イワナ」を見てみたいという好奇心に駆られ、誘われるままについて行ったのである。

結局、その日は空振り。自然にすっかりと目を向けていなかったのだと思ふ。清らかな水の流れを生む森の中に、シカのような大型は哺乳類が野生のままに生きている、ということがとても新鮮に感じられた。

以来、シカとの出会いを求めて五葉山通いを始めた。その頃、ふとしたことで、五葉山は「ホンシユウシカの北限の生息地」であることを知った。山中の沢を何度も釣り歩いてはいたが、シカに出会ったり、その痕跡を見つけたりすることはなかった。今思えば、水の中ばかりに気を取られ、周囲の

紀先生(当時)の調査活動に参加させていただき、多くの事を学んだ。何年か経つうちに、自分なりの観察方法を身に付け、四季を通じてシカの生態を追いつけることができるようになり、以後、長年にわたって躍動する野生のシカの姿を中心に、

私(佐藤嘉宏)が、五葉山や他の生息地で観察、撮影してきたツキノワグマは相当数にのぼるが、どの個体も臆病でとなし、特に母グマは深い愛情と厳しさを帯びて子育てをする。子育てに悩む人間の母親たちにもぜひ見習ってほしい、と思うくらいである。

五葉山と付き合うようになって30年。こんなことを考えている今日この頃である。

【執筆プロフイール】
一九五六年生まれ、一関市在住。中学校時代から登山に親しむ。県内各地の小学校に勤務し、現在、一関市立厳美小学校副校長。五葉山をはじめ県内各地の野生生物の観察、写真やビデオでの撮影を続ける。

五葉山の生き物たちを見つめて

一関市赤荻 佐藤 嘉宏

五葉山に生息する生き物の資料を集め、沢水の中ばかりに注いでいた注意と視線を周囲の森にも向けるようにし、地形や植生などの特徴を頭に入れておいた。

この数年、観察や撮影に力を入れているのはツキノワグマである。多くの人は、ツキノワグマは肉食恐竜のようにどう猛で恐ろしい動物だと思っているが、これは、まれに起こる不幸な出会いによって、人に危害を加えるという

の野生動物を代表するツキノワグマやホンシユウシカも、今や人間たちによって、やっかい者扱いされている。畑を荒らし、牧草を食い、時には人に危害を加えるという

ことで、「害獣」などと呼ばれることもある。が、これは彼らの本来の姿ではない、と私は思う。その真の野生の姿を多くの

さらに、地元のハンターを訪ねてシカがよく見られる場所を教してもらったり、五葉山でシカの生態研究を行っていた東北大学(当時)の高槻成

た事が大々的に報道され

たい。

頃である。

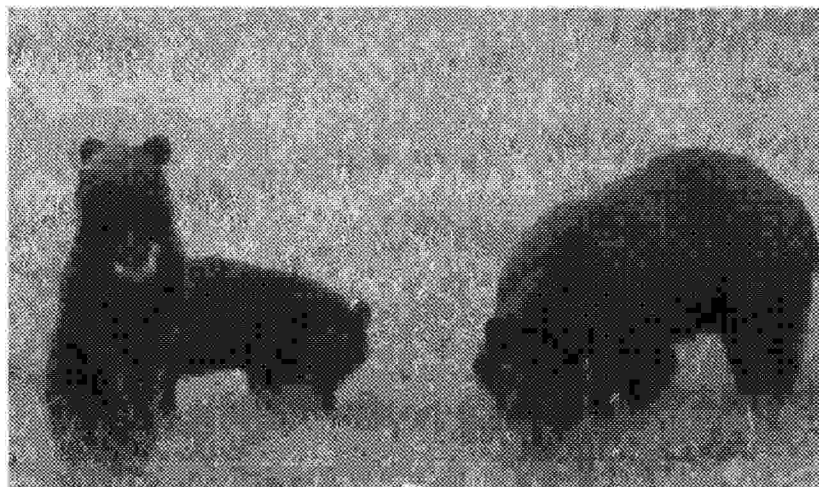
リレー
エッセイ

の真の野生の姿を多くの

の真の野生の姿を多くの

の真の野生の姿を多くの

の真の野生の姿を多くの



イナゴを食べるために草原に出てきたツキノワグマの親子(2008年9月、五葉山)